

玉糸を使った織物についての一考察 田中 竜也

はじめに

豊橋の製糸業は明治時代から発展し始め、昭和初期には基幹産業の一つとなった。なかでも、「玉繭」と呼ばれる、二匹の蚕が作った繭から繰り出す「玉糸」は、主要な生産物であった。豊橋から国内外の各地に出荷され、銘仙や紬といった着物や帯、布団の生地、室内装飾の織物などに利用された。¹⁾

玉糸は当地方の特産物であったにもかかわらず、その織物の特徴について記した文献は少なく、まとまった資料に乏しいのが現状である。²⁾ 本稿では、玉糸が使われている織物の特徴について考察する。文献資料や、豊橋の玉糸による織物、玉糸の使用が認められる銘仙などの着物の調査を通して、判明したことを挙げていく。

用語辞典による説明

最初に、用語解説書の記述を取り上げる。『テキストスタイル用語辞典』³⁾では、「玉糸」を次のように説明している。

二匹以上の蚕がひとつの繭を作ったものを「玉繭」といい、玉繭から繰りとった糸のこと。蚕同士の糸が交錯するため、節のある不規則な糸になる。この野趣のある特徴を生かし、銘仙、シャンタン、紬など節のある織物に使用される。近年では、蚕の改良などもあり玉繭は少なくなっている。

玉糸は複数の蚕による繭から絡まった状態で引き出されるため、節のある不規則な糸になる。その糸で織った生地には節が表れる。ここでは節

の出が玉糸の主な特徴とされている。節のある糸は、一般に「節糸」といわれる。節糸の説明は、同書では以下のようになっている。

糸の太さが均一でなく、所々に節があったり太さにムラのある糸の総称。絹糸では玉糸、熨斗糸⁴⁾などがある。また、スラブ・ヤーンのように紡績の段階で不規則な節を入れた意匠糸⁵⁾などもある。

節糸は節のある糸の総称とされている。あちこちに節があつて、太さが均一でない糸を指す。玉糸だけでなく、熨斗糸や節の加工を施した意匠糸も含まれる。

生糸との比較

生糸との比較から玉糸について述べた文献もある。生糸とは繭から繰りとったままの、精練していない糸のことである。豊橋の製糸業について書かれた『糸の町』⁶⁾の中で、玉糸は次のように述べられている。

玉繭は二匹の蚕で一個の繭を作った繭ですから、従つて糸が交互になつていますので、精繭より解舒(糸のホグレ)も悪く、値段も安いのです。その繭から挽いた糸が玉糸です。「……」
製品は生糸のような細糸は挽きませんが、三十デニールより二百デニール⁶⁾の糸を挽くのですが、「糸のホグレ」が悪いので、節とズルができるのが玉糸の特徴です。

精繭^{せいきん}とは一匹の蚕が作った繭のこと、生糸に用いられる。玉糸の特徴として、生糸よりも太く、節とズル(塊)ができる点を挙げている。生糸と玉糸を比較すると(図1)、生糸に比べて玉糸には光沢が少ない。

玉糸の方が太く、ざっくりとしている。拡大してみると(図2)、生糸の太さは均一に近く、ねじれも少ない。一方、玉糸にはよれが目立ち、太さがいびつに見える。

豊橋ゆかりの織物

まず、豊橋製の玉糸を使った織物を取り上げる。《色無地袖袷長着》(図3)には、豊橋でかつて工場を営んでいた大林製糸の糸が使われている。平成六年(一九九四)頃に作られた玉糸を反物にして、それを平織りの長着に仕立てたものである。⁸この着物には経糸、緯糸ともに玉糸が使われている。玉糸とはいっても、絹糸としての光沢があるように感じられる。その一部分(図4)をみてみると、縦と横の方向に節ができていくことがわかる。さらに拡大した写真(図5)では、経糸の太くなった部分に緯糸が交差しているため、織り目が盛り上がって見える。

次に、風呂敷(図6)⁹の事例を取り上げる。大林製糸の玉糸を使って、平成五年(一九九三)頃に織られたものである。先の例の着物と同じように、絹の艶がある。風呂敷の一部分(図7)をみてみると、一方向のみに節が表れ、着物と比べてその出方は穏やかである。織り方、染め方によっても違いが出るため、風呂敷の方は機械織りで節の出が少ないように思われる。とはいえ、玉糸による節が表れていることと、絹としての光沢を備えていることは共通している。

玉糸の使われた銘仙

銘仙¹⁰とは、大正から昭和初期にかけて流行した平織りの絹織物で、玉糸や熨斗糸などの節糸がよく使われている。主要な産地にあたる関東地方北部や西部の伊勢崎(群馬県)、秩父(埼玉県)、足利(栃木県)、桐生(群馬県)八王子(東京都)などは、当時、豊橋の玉糸の出荷先であ

った。銘仙の生産量は特に大正一〇年(一九二一)頃と昭和五年(一九三〇)頃が多く、この時期は豊橋の玉糸生産量も最盛期を迎えている。¹¹

ここでは、玉糸が使用されているとされる銘仙を取り上げる。埼玉県立歴史と民俗の博物館には五百点を超える銘仙が所蔵されており、そのうち《孔雀羽文様銘仙長着》(図8)では、経糸に絹紡糸、緯糸に玉糸の利用が認められるという。¹²絹紡糸とは、屑繭や生糸に適さない糸を短くし、撚り合わせて糸にする、紡績という工程を経て作られた糸である。この着物を実見したところ、《色無地袖袷長着》(図3)と比べ、光沢が劣っているように感じられた。一部分の拡大写真(図9)のような節がみられるものの、数はそれほど多くない。

絹紡糸は生糸や玉糸のような長繊維ではなく、屑糸の短繊維を材料にしているため、生糸などよりも光沢が控えめになる。¹⁴また、紡績するの太さが揃っている。それゆえ、絹紡糸を経糸に使ったこの着物は、その糸の特性を引き継いでいると考えられる。

別の銘仙の事例をみてみると、足利織物伝承館で調査した銘仙の反物(図10)には、金糸と銀糸が使われていた。¹⁵その布地の表面(図11)をみると、金糸と銀糸の織り目が盛り上がっていて、緯糸の方向には節が目立つ。《孔雀羽文様銘仙長着》(図8)と比較しても、節の数はこの織物の方が多い。また、ところどころに糸のほつれがある点は、《色無地袖袷長着》(図3)と似ている。

昭和初期には、金糸や銀糸といった豪華な糸がしばしば玉糸とともに用いられた。また、大柄で派手な模様が流行している。¹⁶しかし、戦況が激しくなるにつれて統制が進み、豪華な糸の使用は禁じられた。昭和一八年(一九四三)頃からは銘仙の生産も中止されている。

大きく牡丹があらわれたこの反物には、節が多いことに加えて、金糸、銀糸があることから、玉糸が使用されていると推測される。

他の織物との比較

節のある絹織物としては、紬がよく知られている。紬は屑繭などで真綿を作り、そこから紡ぎ出された紬糸を使った平織りの着物である。産地によっては紬糸のほか、玉糸や生糸も使われる。ここでは紬糸を使用した織物を取り上げる。紬の端布(図12)¹⁷⁾をみると、節は多いものの、その出方が玉糸の場合と比べ、総じて雑に感じられる。表面に擦れたような色のむらがあり、光沢は少なめで、ざっくりとした風合いをしている。玉糸を使用した織物と拡大して比較(図13)すると、《色無地袖裕長着》では織り目が整っているのに対して、紬の方は毛羽立ってみえる。こうした不揃いの糸がざらついた感じを生んでいる。紬糸は短い繊維を絡めて糸にするため、繊維の長い生糸や玉糸と比べると、光沢が控えめになっていると考えられる。

おわりに

玉糸は二匹の蚕によって作られた玉繭から繰りとった糸であるため、糸が絡まって節のある糸になる。生糸と比較すると、太さが均一ではなく、その艶も少ないことがわかる。

玉糸を使用した銘仙などの着物を調べたところ、絹特有の光沢を帯びながらも、玉糸の織り込まれた方向には節が多く表れることが確認できた。同様に節を特徴とする紬と比べると、後者は光沢がより少なく、糸の乱れや擦れがざっくりとした風合いを生んでいることがわかった。

注意すべき点は、これらの特徴が必ずしも玉糸の織物すべてに当てはまるとは限らないことである。玉糸の配合具合や品質の違いによって、節などの表れ方も異なると思われる¹⁸⁾。また、座繰りか器械かといった操糸方法や、織り方の差異による影響も考えられる。今後は調査方法を再検討したり、その対象を広げること、より深く掘り下げた考察を行う

必要があるだろう。

(豊橋市美術館学芸員)

註

- (1) 豊橋の玉糸がどのような織物に使われていたかについては以下を参照。田中竜也「豊橋の玉糸による織物」『豊橋市美術館研究紀要』二一号 三〇―三四頁 二〇二一年
- (2) 豊橋は製糸業が盛んであったも、機業地ではなかったため、糸を出荷した後の用途についての情報は少ない。また、玉糸は通常高級な絹織物に使われなかったため、その織物への注目度は概して高くなかった。
- (3) 成田典子『テキスタイル用語辞典』テキスタイル・ツリー 二〇二二年
- (4) 熨斗糸(のしいと)とは、繭の糸口を見つけ出すために、外側から繰り出した糸のことで、節があつて太くなる。
- (5) 橋山徳市『糸の町』橋山徳市 一九九〇年 一二頁。徳山氏は豊橋にあつた玉糸専門工場の糸徳製糸に長く勤めた人物。
- (6) デニールは糸の太さを表す単位。長さ九千メートルの質量をグラムで表した値と等しい。
- (7) 大林製糸は明治二一年(一八八八)に大林宇吉が玉糸工場を建設して操業を始めた。豊橋の製糸業界で最大規模であつたものの、平成九年(一九九七)に廃業した。
- (8) 玉糸が製作された頃、飯田市の工房「ひろせ」で織って反物にしてあつたものを、平成二四年(二〇一二)頃、新城市の「きもの処 三ツ輪」で桜色の草木染による染織仕立てにした、平織りの裏地のある長着である。着物も風呂敷も、大林家が所有していた。身丈一五七、桁六四センチ。ふんわりとした質感で手織りと思われる。同家の資料については大林ひろ美氏から伺つた。
- (9) 大林家に進呈された風呂敷。「ふじみやび 絹100%」のタグが付いており、

京都の宮井株式会社の商品として販売されたものと思われる。九二・五×八八センチ。

(10) 関東地方の養蚕や織物生産の盛んな地域では、無地や縞柄が主流であった絹織物に、大正時代以降、緋(かすり)などの複雑な模様が織られて、銘仙という名前で販売されるようになった。

(11) 埼玉県立歴史と民俗の博物館編『特別展「銘仙」埼玉県立歴史と民俗の博物館 二〇二一年 六三頁。豊橋市史編集委員会編『豊橋市史』第四巻 一九八七年 五五九頁

(12) 木村和恵コレクションとして、平成三〇年度に銘仙五一七点と銘仙の関連資料を収蔵。前掲書 九〇頁。企画展「銘仙」(会期：二〇二二年一〇月一五日～一二月四日)で紹介された。

(13) 埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵、資料番号SPM2018-0368。同館学芸員の町田歩未氏、岩橋直樹氏、鈴木一史氏には、企画展開催中でご多忙にもかかわらず、調査に快くご協力いただいた。この着物は足利市立美術館で開催された「VIVID銘仙」展(会期：二〇一六年十月二二日～一二月二五日)で展示された。図録には当資料について以下の説明がある。矢羽根に孔雀羽模様銘仙袷長着 製作年：昭和五―一五年(一九三〇―四〇)頃 技法：解し緋 経糸／緯糸：絹紡糸／玉糸 身丈一四四・二 桁六二・〇 木村和恵コレクション。足利市立美術館監修『VIVID銘仙』青幻舎 二〇一六年 一二四、二〇一頁

埼玉県立歴史と民俗の博物館において《秩父縞(縦縞)文様銘仙》(資料番号SPM2018-0760)など昭和初期以前の縞柄の銘仙も調査した。秩父地方をはじめ埼玉県や群馬県などでは、明治時代に輸出に適さない玉糸などを使って、「太織(ふとり)」という縞柄や無地で黒、茶、灰色の着物が作られ、主に日常着として利用されていた。埼玉県立歴史と民俗の博物館編 前掲書 一二―一四頁。この時調査した着物に玉糸が使われているという確証はないが、座繰りの糸らしいふんわりとした風合いを備え、総じて緯糸方向に節が多くみられ、玉糸を使った太織や初期銘仙の特

徴と合致する。

(14) 新井正直「糸から始まる物語―関東銘仙産地の歴史、風土を訪ねて」藤井健三監修『別冊太陽 銘仙 大正昭和のおしゃれ着物』平凡社 二〇〇四年 一二五、六頁

(15) 足利織物伝承館では同館の菅谷智子氏と調査にご同行してくださった染織史家の新井正直氏から多くのご助言をいただいた。

(16) 図録『VIVID銘仙』の作品リストでは、緯糸に玉糸と金糸、銀糸が併用されている着物が四点紹介されており、製作年は一点が昭和一〇―一三〇年(一九三〇―五五)頃、三点は昭和一〇―一五年(一九三五―四〇)頃となっている。昭和七年(一九三二)頃から銘仙に金銀糸の織り込みが表れることと、一〇年頃には派手で大柄な模様が好まれたことは他の文献でも指摘されている。藤井健三「大正・昭和の銘仙着物の流行」藤井健三監修 前掲書 一二〇頁

(17) 宇野千代デザインによる紬の端布、昭和五〇年代。逸見織物からの提供。同所の逸見恭子氏と秩父銘仙協同組合副理事長の浅見義之氏からは、玉糸と紬糸の織物の違いについてご助言をいただいた。

(18) 明治三四年(一九〇一)に設立された三遠玉糸製造同業組合では、玉糸を品質によって格付けしていた。その違いについて、玉糸は純絹であって生糸と同質であり、品質優良であるものは生糸の代用として遜色なく、普通製品としては玉糸特有の節によって、渋みを感じられる、と述べている。三遠玉糸製造同業組合編『三州玉糸』三遠玉糸製造同業組合事務所 一九二八年 一〇頁

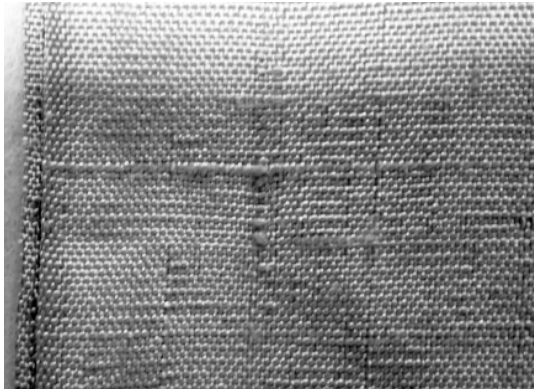


図4 色無地紬袷長着（部分）

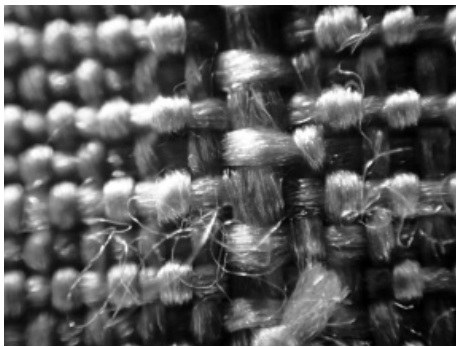


図5 色無地紬袷長着（拡大）



図6 風呂敷

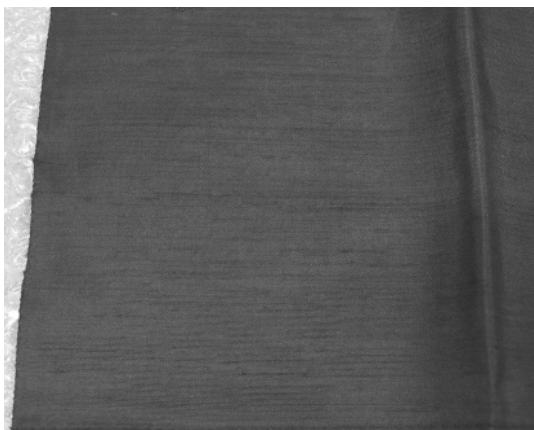


図7 風呂敷（部分）



図1 [上] 生糸、[下] 玉糸（60 デニール）

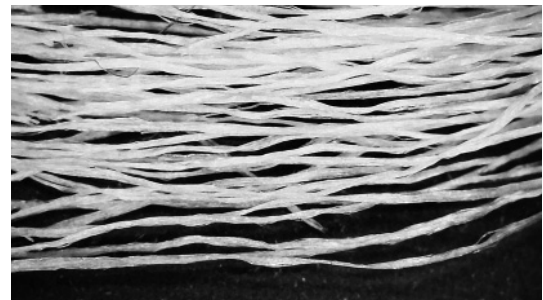


図2 [上] 生糸（拡大）、[下] 玉糸（拡大）



図3 色無地紬袷長着



図 11 銘仙の反物（部分）



図 8 孔雀羽文様銘仙長着

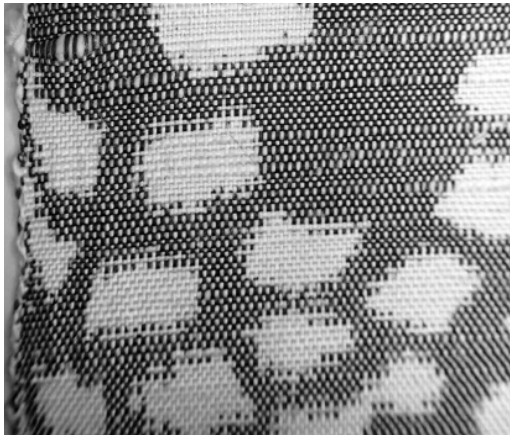


図 12 紬織の端布（部分）

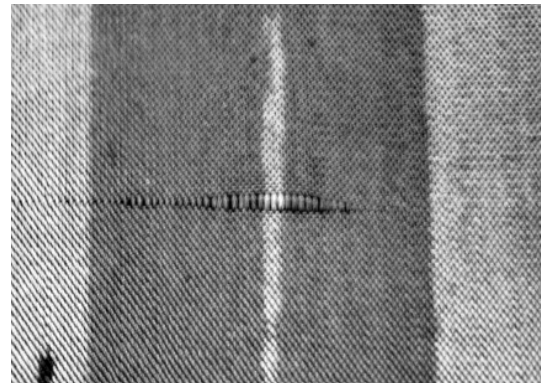


図 9 孔雀羽文様銘仙長着（部分）

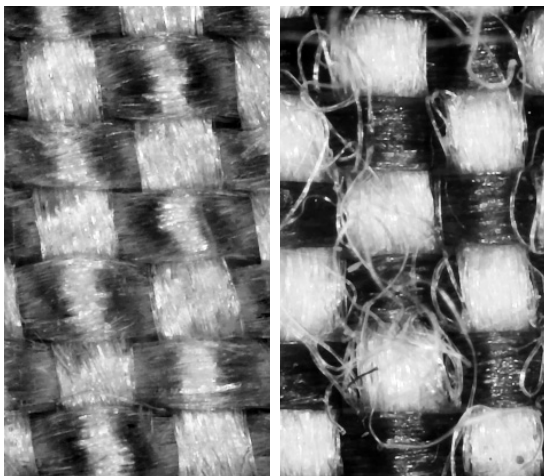


図13 [左] 色無地紬袷長着（拡大）、
[右] 紬の端布（拡大）



図 10 銘仙の反物